

「稲生物怪録」研究

——文学的視点による考察——

伊 藤 紘 圭

はじめに

広島県の三次市に「稲生物怪録^{注1}」という怪異譚が伝わる。

「稲生物怪録」は、稲生武太夫（幼名・平太郎）を主人公とした物語である。稲生武太夫は実在の人物で、彼が十六歳のときに体験した怪異が基になっている。

寛延二年（一七四九）五月、平太郎は、隣人の三井権八と「勇気だめし」として、百物語をすることにした。さらに、比叡山に登り、帰ってくることも付け加えた。百物語を行うと妖怪が出るという伝えられているが、彼らの身には何も起きなかった。しかし、七月一日から平太郎の身に怪異が起き始める。平太郎はそれに耐え続け、怪異が起きてから三十日目、魔王・山本五郎左衛門が現れ、平太郎の姿に感嘆し、妖怪を引き連れて退散していった。

「稲生物怪録」は諸本が多く存在し、怪異の内容や出現順が異なっているものもある。それゆえ、一か月に及ぶ怪異のバリ

エーションはより豊富になっている。「稲生物怪録」はその多種多様な怪異が注目されることが多い。

また、国学者の平田篤胤とその門人らによって、諸本の校合整理がなされている。人の手で写され、広まりながら少しずつ変化が現れた。書写や編纂のなかで生じた変化は物語にどのような影響や効果を与えているのか。そこに書き手の意図は見られるのか。諸本比較を通して見ていく。

それと同時に、主人公を中心としたキャラクターや、物語の性質及び特徴を分析し、「稲生物怪録」の近世文学史における位置づけを考えていきたい。

第一章 三十日目の怪異からみる

一 一目目との関連性について

「稲生物怪録」は諸本によって数か所違いが見られるが、なかでも形態・形式において大きく異なるのは七月三十日の怪異

である。

七月三十日は平太郎の身に起きていた怪異が終わる日であり、最も盛り上がる場面の一つである。

結末の大筋は次の通りである。

夜、山本五郎左衛門という名の男が現れる。男は「魔（魔族・魔王）」であり、一か月間の怪異はこの男によるものであったことが判明する。最後の試練として平太郎の嫌いなミミズを這わせたが、これにも平太郎は耐え、物の怪に打ち勝ったのである。そして山本五郎左衛門は妖怪たちを引き連れて去って行った。

この場面について諸本を比較し、物語のクライマックスの描写と平太郎と五郎左衛門の人物像について分析を行う。

なお、本文末尾に、七月三十日の怪異の内容を比較した、諸本対照表を添えたので、随時参照されたい。

五郎左衛門の登場場面の本文については、次の四つの系統に分類できる。

①大きな手の出現後、大男の山本五郎左衛門登場。帰還の際、駕籠から髭足が飛び出る。

②大きな手の出現後、大男の山本五郎左衛門登場。帰還の際、駕籠から髭足は出ていない。

③大きな手の出現なし。大男の山本五郎左衛門登場。帰還の際、駕籠から髭足が飛び出る。

④大きな手の出現なし。山本五郎左衛門（「大男」）の描写なし

登場。帰還の際、駕籠から髭足が飛び出る。

①の系統は、平田篤胤の校合整理本『稲生物怪録』のみである。②の系統には、柏成甫の聞き書きによる『稲生物怪録』、柏本の絵入諸本絵巻といえる『稲亭物怪録（絵巻・絵本）』が分類できる。③の系統は、稲生武太夫自身の体験談形式の『三次実録物語』があてはまる。④は、絵巻の『怪談之由来併画』『稲生武太夫一代記』『稲生物怪録絵巻』、絵本の『稲生平太郎物語』『稲生逢妖談』『稲亭物怪図記』である。④の系統は、本文に五郎左衛門が「大男」であるという記述はない。また、絵を見ても、平太郎より体格の勝る男性が描かれているが、『稲亭物怪録』のように明らかに平太郎や人間とは比較にならないほどの大男が描かれているわけではない。このような相違は、物語にどのような影響や効果をもたらしているだろうか。

①②の系統にのみ出現する大きな手には、毛が生えており、七月一日に平太郎を襲った髭手を想起させる。家鳴りや畳が跳ね上がる怪異を除けば、手を替え品を替え、いわば「日替わり怪異」が出現していたが、ここで初日を想起させるものが出現するところに、作者の意図を感じる。

平田篤胤の『稲生物怪録』は柏成甫による『稲生物怪録』と『三次実録物語』を校合整理しており、両系統から初日と最終日に出現する妖怪が同一のものである可能性を連想させるものを抽出している。まず、髭手を現し、平太郎を襲おうとすることで、七月一日の髭手の大男を想起させ、続いて登場した五郎

左衛門も大男であるため、髭手と五郎左衛門が同一の妖怪であると疑いたくなる。また、五郎左衛門が駕籠に乗って帰還する場面の、駕籠から大きな髭足が飛び出ている描写も合わせり、一日に平太郎を掴んだ大きな髭手、大男の姿をした山本五郎左衛門、駕籠から飛び出た髭足の三つの共通点が浮かび上がる。三十日の三つの要素が揃うことで、スムーズに一日の髭手の大男を思い起こすことができる。

このことから、七月一日に出現した髭手の大男の正体が山本五郎左衛門であると仮定する。五郎左衛門は、厄年にあたり比熊山で肝試しを行ったことを理由に髭手の大男として現れた。しかし、一筋縄ではいかず、平太郎の近辺にさまざまな怪異を起こし、降参させようと試みるものの、どの怪異でも効果は得られない。ならば、最後の試練とでもいうように名乗りながら袴の大男が現れる。

障子ぐわらりと明ける故、ふり返り見れば、大きな手を出し平太郎をとらへんとす。(中略)平太郎爰ぞと思ひぬき打に切付ければ、彼手を早く引て跡の障子をはたと立たり。(中略)暫して障子をさらりと明て、背の高きこと鴨居よりは一尺はかり上なり。至極肥りて四角四面の大男、ゆうくと出来るを、つくくと見れば、年の頃四十ばかりにて、甚人品能花色の碓子に浅黄の上下を著し、腰に兩刀をさして、しづかに歩行て平太郎が向ふ座へ居りけるを、(中略)われは山本五郎左衛門と云者なり、さんもと

はやまもと、かくべしと申ける。

〔稲生物怪録〕四一七三八)

五郎左衛門は、平太郎に音を上げさせようと、次のような試練を与えた。

平太郎が居りし四尺計り左の方に炬燵ありしが、(中略)彼すびつの灰次第々に舞上りて、茶釜をかけし如く丸くなりしが、(中略)唐子の髪などの如し。見るうちに其二ツの丸きものより、湯気立てぐつくと煮上る体なれば、(中略)よく見ればみなみ、ずにて、煮えこばれてはうち／＼(中略)虹剣を見れば気も消る計り気味悪く覚え、草道などを行時に、み、ず数々出て居る事あり、其道をば通り得ぬほどのきらひなり。(中略)平太郎も是には大きに辟易して、胸さわぎ仕出して気をふさぐやうなりしが、能々考へ見るに、此所に虹剣の居るべきやうなし、是は我嫌ひな知て、かやうに目に見するものならん、何程の事かあらんと、覚悟して漸に気を取直し、気を失ふ程の事はなけれど、何ぶん元来大味ひの事なれば、大にこまりけるが、(中略)凡一時計りも其通りなりしが、又次第々に元の如く這ひかへりければ、炬燵のふたもまた舞ひ来りてもとの通りになりければ、すこし心も落付たり

〔稲生物怪録〕四一七四〇(七四一)

平太郎はミミズにも耐え、ついに五郎左衛門が降参し、九州へ下ると言う。そして外には、袴を着た大勢の妖怪たちが、五郎左衛門を迎えに来るのである。そこには一つの駕籠が用意されている。

五郎左衛門は駕籠に乗ると、一日の髭手の大男が自分であったと示すかのように、それまで見せていなかった髭足をはみ出したまま空へ昇っていく。髭手の大男と五郎左衛門が同一の妖怪である可能性を暗示することで、髭手の大男が伏線の役割を果たすことになる。物語は平太郎を軸に進められるが、この構成により、怪異の裏側、つまり妖怪側の五郎左衛門一派が計画的に一致団結して、平太郎を驚かさうとする様子が見えてこないだろうか。

②は柏本系統であるが、この系統では大きな手の出現と山本五郎左衛門が大男である描写から、一日の髭手の大男を連想させている。しかし、平田本のように大きな手について具体的な特徴を示す表現はない。

ここで『稲亭物怪録（絵巻・絵本）』の絵に着目したい。障子を開けて伸びる大きな手は毛深い。本文に髭手の描写はないが、絵によって具体的な描写が補われている。この七月三十日に出現し、平太郎を捕まえようとする大きな髭手は、一日の髭手の再現である。

初めて起きた怪異にも関わらず、一日の髭手にも臆することなかった平太郎であるが、髭手には捉えられ、退治すること

ができなかった。このことは平太郎にとって悔しい出来事であり、同じような妖怪が出現すれば必ず退治したいと思うだろう。また、これは五郎左衛門にも同様のことがいえる。この対峙は両者にとって雪辱戦ともいえるだろう。

また、②の系統は、本文に髭足の記述はないものの、絵巻の『稲亭物怪録』の絵には、五郎左衛門が乗った駕籠から毛の生えた手が出ている。この絵巻では、一日の髭手の大男の正体が、実は五郎左衛門であったことをほのめかず描写になっている。

柏成甫による『稲亭物怪録』でも三十日に大きな手が出現し、あの髭手の大男を連想できるが、『稲亭物怪録』と比較すれば、より強い関連が見られるのは後者であるだろう。先に示した通り、成甫の『稲亭物怪録』と『稲亭物怪録』は最終日だけでなく全体を通して同じ構成である。『稲亭物怪録』で、視覚情報が付与されることにより、三十日の大きな手に毛の描写が加わり、妖怪の姿がより鮮明になる。これにより、一日の妖怪と同一のものであるという推測により明確な理由を見出すことができる。

しかし、一日と三十日の髭手が同一のものである可能性を想像するには、不足している描写がある。『稲亭物怪録』の絵に着目したが、『稲亭物怪録』の七月一日と三十日の大きな手を比較すると、明らかにその大きさが異なっている。一日の髭手は両手で平太郎を掴んでいる。一方、三十日の髭手は片手で平太郎を掴めるほどの大きさである。筋肉質な腕に毛が生えた描写は統一しているが、仮に作者が一日目髭手の大男と三十日の

髭手を同一のものとし、最終日で初日の再現を果たそうとしていたのならば、いささか詰めが甘いような印象を受ける。

③は武太夫の体験談となるが、五郎左衛門の大男の描写と帰り際の髭足の描写がある。この点から、武太夫自身の、五郎左衛門と一日目の髭手の大男が同一の妖怪であるという推測が活かされているのではないかと考える。篤胤はそこに着目し、物語により厚みを持たせるために髭足の描写を取り入れたのではないだろうか。

先に述べたように、④の系統では、①の平田本とは異なり、五郎左衛門は大男ではなく、体格の良い男性と表現されている。絵の袴の男も平太郎より大きく体格の良い姿で描かれているに留まり、『稲亭物怪録』のように、明らかに人間ではないとわかるような大男ではない。

ところが、駕籠に乗ると髭足が飛び出ており、④の系統でも髭手の大男と五郎左衛門が同一妖怪であると連想できる。五郎左衛門の去り際に現れる髭足は、それまで品良く袴を身につけた人間のような魔王の印象を突如として覆し、人ならざるものであることを示し、落差を作りだしている。

以上の分析から、次のように言える。初日と最終日の妖怪の関連性は、毛の生えた大きな手、もしくは足を描くことで強く印象付けている。五郎左衛門が大男であるという点は、五郎左衛門の魔王という妖怪としての格の高さを、人間離れた体の大きさでわかりやすく表現している。体格の良い男性として描かれているものについては、武士のような出で立ちのみで、こ

れまで平太郎を襲ってきた妖怪とは異なる位の妖怪であると示している。五郎左衛門の身体描写は、髭手・髭足の妖怪との関連にはあまり重要な要素ではないだろう。

第二章 平太郎と五郎左衛門の人物像

本章では登場人物、なかでも主人公の平太郎と、怪異の原因ともいえる山本五郎左衛門に焦点を当て、怪異譚のキャラクターとしての描かれ方について考えていく。

繰り返しになるが、平太郎の怪異を退ける方法は極めて静かであり、怪異にとつても効果的であることがわかる。平太郎の友人や稲生家で起きる怪異の噂を聞きつけた畷の名人らが妖怪退治を試みると恐怖したり返り討ちにあつたりすることによって、かえって平太郎の行動の正しさと強い精神と忍耐力を持っている人物像が浮き彫りになる。特に相撲や一緒に勇氣試しをした隣人の三井権八は、平太郎の強さを際立たせている。ちなみに、いずれの諸本でも、権八は平太郎が髭手の大男に襲われている七月一日の同時刻に、一つ目小僧に遭遇し、金縛りに遭っている。一日目に出現した妖怪とそれに対する二人の反応に大きな差をつけることで、平太郎の主人公としてのキャラクターを際立たせているのである。

また、ある日には、畷の名人が訪れ、妖怪退治に名乗り出るものの失敗してしまう。その際、平太郎はどこか他人事のような話である。七月一日の怪異の後には権八と妖怪退治をしようと話

し合っていた。しかし、連日の怪異体験から無視が最も効果的であることを知った平太郎からすれば、名人らの行動は滑稽に映るだろう。

「稲生物怪録」は主として平太郎の怪異体験であるが、稲生家には平太郎の友人や異の名人を含め、多くの客人が訪れている。周囲の人間の反応を描くことで、平太郎の冷静さが引き立つ。

一日目に髭手の大男を退治しようとしたように、平太郎は怪異を無視しない、化物退治を試みる勇敢な一面も見られる。七月三十日には怪異の黒幕ともいえる魔王の山本五郎左衛門が登場する。五郎左衛門退散の際、平太郎は、このまま黙って帰らせるのは悔しいと思い、刀を抜く。しかし、虚しくも五郎左衛門に頭を押さえつけられ、一矢報いることはできなかった。この場面は、柏本、平田本、『稲亭物怪録』に見られる。

折口信夫は平太郎の行動について、和解したにも関わらず退治しようとするのは、人間の根性の悪さや卑しさを表現しようとしていると述べている。^{注2}しかし、この行動は、平太郎の怪異に耐える冷静さだけでなく勇ましさを表現しているのではないかと考える。そもそも折口の言うように平太郎と五郎左衛門は和解しているのだろうか。五郎左衛門が登場してから退散するまで、始終五郎左衛門が優位に立っている。平太郎が嫌いなミズを大量に出現させ、這い回らせるなど新たな仕掛けを繰り返している。また、これまでの怪異の元凶は全て自分の仕業であると告白し、平太郎の忍耐力に感心し、再び怪異に見舞われ

ることがあれば己を呼ぶようにと槌を与える。このとき、五郎左衛門は一方的に話を進めるばかりで、平太郎の同意は見られない。槌に関しても感謝している様子もないため、和解してるとは言えないのではないだろうか。平太郎が五郎左衛門の帰り際に切り付けるのは自然な行為であると考ええる。

物語全体を通して、平太郎の怪異に対する冷静さだけでなく退治しようとする勇敢な人物像を巧く表現しているわけだ。

『三次実録物語』『怪談之由来併画』『稻生武太夫一代記』『稲生物怪録絵巻』『稻生平太郎物語』『稻生逢妖談』『稲生物怪図記』では平太郎が斬りかかる描写はなく、五郎左衛門が平太郎に見送るように言い、それに従うと頭を押さえつけられる、というように脈絡もなく五郎左衛門の行動が描かれる。

一方、柏本、平田本、『稲亭物怪図記』は、平太郎の攻撃を描くことで、主人公の態度に変化を生み、真に化物に動じない人物であることを明確にしている。また、この描写は、五郎左衛門が平太郎を押さえつけ、身動きを取れなくする行動に意味を持たせることができる。さらに、平太郎と五郎左衛門のキャラクターや力関係を示すのにも効果的である。

続いて、五郎左衛門の人物像についてみていく。

五郎左衛門の登場は厳かな雰囲気が漂う。それは彼の外見が関係しているだろう。諸本によって身体の大きさに差はあるが、袴を身につけ帯刀しており、武士のような姿である。人の形をした妖怪は登場していたが、頭部や毛深い大男など明らか

に異様なものだった。人に近い五郎左衛門の姿は、彼の属する魔族というものが格式のある存在であるということの意味しているのだろうか。『三次実録物語』では五郎左衛門は「日本へは出雲大社へ御願申、御赦し蒙り、三年跡日本へ渡りし」と述べている。出雲大社から許可を得てから日本に渡ったということとは、五郎左衛門は神に近い存在であることを表しているのだろうか。また、入国許可のような手順を踏み、出雲大社の神から許諾されていることは、五郎左衛門の律義な性格を表し、妖怪のなかでも格式があることがわかる。平太郎に対する態度にも納得できる。しかし、魔王とは、仏道において人に厄難を与え、時には悪の道に誘う魔物とされるといふ。仏道と神道が混ざり合うのは不自然だと考えたのか、平田本をはじめ、『三次実録物語』以降の他の諸本でもこのような描写は見られない。

五郎左衛門が魔族であると名乗り、服装や大勢の妖怪たちを引き連れて一人駕籠に乗り込んで帰る様子から、他の妖怪たちとは明らかに異なる権威を持った存在であることは十分わかる。特に、『稻亭物怪録』は五郎左衛門を迎えに来たであろう妖怪たちも人間の姿で袴を身につけており、大名行列のようである。五郎左衛門の格の違いを見せつけているようである。

五郎左衛門のキャラクター設定において注目したいのが、絵巻の『怪談之由来併画』『稻生武太夫一代記』『稻生物怪録絵巻』と絵本の『稻生平太郎物語』『稻生逢妖談』『稻亭物怪図記』である。これらには、魔王の頭になるための条件を五郎左衛門が説明しており、他の諸本には見られないものである。その条件と

は、百人連続で人間を驚かすというものである。『稻生物怪録絵巻』を除いた五つの作品においては、十六歳の勇氣ある少年でなければならぬという制限も課せられている。

百人連続で驚かすことができなかったら、その記録はリセットされてしまうのである。五郎左衛門は八十五人まで記録を伸ばしていたが、八十六人目の平太郎で失敗してしまったというわけである。

この要素は、五郎左衛門の人物設定や魔族の世界観をより明確にしている。自分の目的のためとはいえ、十六歳の人間の少年を相手に、魔王の頭を目指す者が試行錯誤していたと思うと滑稽であり、五郎左衛門の負けず嫌いな性格が見えてくる。先ほど平太郎に対して優位に立っていたと述べたが、この条件や五郎左衛門の現状を考えると、これ以上人間の少年に面目をぶさされるわけにはいかないという、彼の矜持の表れではないだろうか。

また、百人まで残り十五人にまで迫っているなかで、ここまですみ重ねてきた記録が消えてしまうことは、どうしても避けたいという思いや、同じく魔王の頭の座を狙っている神野悪五郎への強いライバル視も伝わってくる。

五郎左衛門の人物像に厚みを増している事柄であるといえるだろう。

諸本を比較して、平太郎の人物像に大きな違いはみられない。平田本、『怪談之由来併画』『稻生武太夫一代記』『稻生物

『怪録絵巻』で見られる氏神へ感謝している描写や、五郎左衛門に一太刀浴びせようとする細かな描写の有無によってわずかな心情を探ることができると留まる。

五郎左衛門の人物像も大きな差異はないものの、やはり、『怪談之由来併画』に類する絵巻や『稻生平太郎物語』と同じ構成の絵本にある、魔王の頭になる条件があることよって、五郎左衛門の負けず嫌いな性格が、よりわかりやすく描かれている。

この物語は意外にも登場人物が多く、平太郎の客人も細かく名が記されている。しかし、彼らを掘り下げる記述はなく、あくまで平太郎を際立たせる役割を果たしていた。さまざまな怪異に耐え抜いた平太郎であったが、五郎左衛門には力では及ばなかったことは、五郎左衛門の立場の強さを表している構図になっている。

第三章 文学的位置づけ

稲生武太夫が連日の怪異に見舞われたのは寛延二年の七月のことである。その後、天明三年に柏成甫が本人から聞いたものをまとめた。ここから多くの写本や異類本が派生し、流布することになった。

「稲生物怪録」は数々の諸本が残されながらも、出版には至っていない。^{注3}人々の注目を得ながら、未出版である理由はどこにあるのか。「稲生物怪録」の文学的位置づけを出版に至らなかった理由の考察をもとに論じる。

近世の怪異文学は、仮名草子、浮世草子、読本、草双紙など多岐にわたって創作された。「稲生物怪録」の書写が盛んに行われていたと考えられる、天明三年頃から文化八年（一八一）頃の近世怪異文学についてみていく。

「稲生物怪録」書写最隆盛期は、草双紙が流行していた時期にあたる。草双紙にも怪異譚が多く作られ、人々を楽しませた。

まず、草双紙における怪談の変化をみていく。青本黒本での怪異譚の趣向について、アダム・カバット氏は、「化物退治談」^{注4}「文芸作品の見立て」「異類合戦物」と分類している。黒本青本の化物退治談の系統として、人間が化物を退治するものと、化物が人間を退治するものがある。ここでは、前者の方に注目したい。

カバット氏によれば、黒本青本で「化物退治談」が最も多く描かれており、その主人公はいずれも豪傑、英雄として描かれている。^{注5}化物退治談における豪傑としての主人公は、草双紙以前にも見られ、物語や説話の定型ともいえる。カバット氏がまとめた「初期草双紙の化物尽くしの一覧」を見ると、源頼光と四天王による酒吞童子退治などの伝説・説話化されたものを基にした、豪快な主人公の作品が多いことがわかる。このような系統は黄表紙にも引き継がれている。

このように、「稲生物怪録」書写最隆盛期は、江戸でも怪異小説が流行していた。「稲生物怪録」は数々の写本を残し、視覚情報を加えながら、校合整理もされた。天保十三年（一八四

二)には出版目的で草双紙風の挿絵が描かれたものも作成されていた。^{注6} それにもかかわらず、なぜ「稲生物怪録」は出版に至らなかったのだろうか。

おそらく、次のような理由ではないだろうか。

平太郎は化物を退治したわけではない。怪異に耐え続けたことで結果的に一連の出来事の源であった五郎左衛門を退散させるに至ったが、草双紙のような妖怪退治を行う豪快な主人公像とは異なるのだ。怪異発生↓放置↓沈静が繰り返されて物語が進む。

柏成甫やその後、書写を行った人物らも、興味の対象は、連日連夜の怪異に重きを置いていた。「稲生物怪録」の物語の趣向としては、妖怪退治物ではあるが、豪快さはない。数々の諸本が残されるなか、平太郎の人物像が大きく変更されていないのは、怪異に対する姿勢が他の作品にはない新鮮さを持っているからであるだろう。

逆に言うとなら、この新しさは出版に至らなかった理由にも関連しているのではないか。

もう一つの理由を考えてみよう。

稲生武太夫が十六歳の夏に体験した怪異は、柏成甫の聞き書きから文字化される。成甫が記録に残したのは、武太夫の語る話を作り話ではないかと疑ったことがきっかけだった。数度聞いても寸分違わない話に、実話であると信じた。そして成甫は

『稲生物怪録』の序文に「他見をゆるしぬ」としたのである。

稲生家の怪異は、事実に基づくものであることやその出来事の珍しさから人々の注目を集める。さらに、猪飼正毅が記したと記録のある絵本の『稲生平太郎物語』『稲生逢妖談』『稲亭物怪図記』では、本文末尾にも「予も亦、深、秘して、他見をゆるさず」と云」とし記されている。いずれも、他見をよしとしなかったことがわかる。五郎左衛門から譲り受けた槌の存在は武太夫自身、意識的に隠していた。五郎左衛門から五十年間是他言してはならないと告げられたためである。そのため、柏本には槌の贈呈がない。

このように、「稲生物怪録」には秘密性があった。その性質を受け継いでいたために、読み物としての出版を躊躇させたのではないだろうか。また、武太夫が五郎左衛門の言葉に従い、槌を隠していたこともあり、個人の所有物としてあり続けたのだと考える。

以上のことから、「稲生物怪録」の近世怪異小説における文的位置づけをまとめる。

「稲生物怪録」は怪異のバリエーションが豊富であることに注目されることが多い。そこに独創性を見出す論を多く見かけるが、怪異そのものには典拠となったものがあり、独創性という点では、やや物足りない。女性の生首や大男、複数の顔が出現するなど、日本の妖怪や怪談でよく耳にするもののように思う。

当時の人々が感じた、「稲生物怪録」への興味は、怪異の種

類や豊富さだけでなく、通常では考えられない平太郎の妖怪退治の姿勢に向いたのではないだろうか。化物が出れば勇ましい主人公が退治する型にはまらない、平太郎は新鮮である。また、これが古くから残る伝説や説話ではなく、比較的近い年代の出来事を基にしたものであるため、興味は一層増しただろう。その点で、この作品は高く評価できる。

しかし、その豪快さの欠如ゆえに、当時の怪異物として、「稲生物怪録」は娯楽的な読み物として捉えられなかった。それが未出版である第一の理由である。第二の理由として同書は、家宝や個人の所有物であることから抜け出せず、怪異小説という俗な面を持ちながら、俗になり得なかつたことが指摘できよう。

「稲生物怪録」はそういった意味で特殊な物語であり、平太郎は唯一無二の主人公であるといえるだろう。

おわりに

一般的に流布した妖怪退治物の物語と比較すれば、豪快さに欠けるが、怪異に対し静観を貫く平太郎の姿勢は独特で斬新である。怪異のバリエーションも魅力的であるが、主人公の対応もこれまでの英雄と異なり、面白味がある。

「稲生物怪録」は、実体験に基づく豪傑ではない新しい主人公の妖怪退治談であることと、鳥山石燕の『画図百鬼夜行』のようなさまざまな姿の妖怪を紹介する二面性を持っている。このような点が近世に多くの写本が作られただけに留まらず、近

代文学に取り入れられたり、近年でも漫画のモチーフになったりしているのではないだろうか。「稲生物怪録」にはいまだに人々の興味を惹くものとして存在しているといえよう。

諸本対照表

A 『稲生物怪録』 (柏成甫)	B 『三次実録物語』 (稲生武太夫)	C 『稲生物怪録』 (平田篤胤)
<p>(A30a) 夕立が降り、雨が強まると家鳴りも強くなる。</p> <p>(A30b) 夜四つ時頃、大きな手が平太郎を襲う。</p> <p>(A30c) 鴨居より一尺ほど高く、花巻の袴を着て帯刀した大男が現れる。</p> <p>(A30d) 大男は山本五郎左衛門と名乗り、魔王の類であるという。同類には神・野悪五郎がいる。</p> <p>(A30e) 炬燵の蓋が開き、炭が舞い上がったと、茶釜を沸かしたようになり、釜の缺付が二つの丸い唐子髪のようになる。</p> <p>(A30f) 唐子髪のような球体は湯気立ち、平太郎の嫌いなミニズが現れ、這い上がる。一時ほど耐えているとミニズは出て来た場所へ戻り、炬燵も元通りになった。</p> <p>(A30g) 平太郎の厄年にあたり、比熊山で肝試しを行ったこともあり、五郎左衛門が難を与えた。</p> <p>(A30h) 五郎左衛門は、これから九州へ下るため、今宵から怪異は起きないと言っ。</p>	<p>(A30a) 夜四つ時頃、体格の良い大男が現れる。大男は浅黄小紋の袴を身に着け帯刀している。</p> <p>(B30a) 平太郎は退治しようとするが、刀を納めて話を聞くよう言われる。</p> <p>(A30b) 炬燵の蓋が開き、煙が噴き出る。</p> <p>(A30c) 煙の間からミニズが出てきて平太郎の身体を這う。平太郎はミニズが嫌いだ、耐えていると消えた。煙や頭も消える。</p> <p>(A30d) 大男は三千世界の魔王であり、山本五郎左衛門と名乗る。同類に信野悪太郎がいる。</p> <p>(B30b) 五郎左衛門は、三年前に出雲大社で許しを得て日本に渡った。日本に初めて訪れたのは源平合戦の頃で、当時は悪太郎の部下だった。</p> <p>(B30c) 五郎左衛門は、これから九州へ下るため、宵限りで帰るため今後、怪異は起きないと言っ。</p>	<p>(A30a) 夕立が降り、雨が強まると家鳴りも強くなる。</p> <p>(A30b) 夜四つ時頃、大きな手が平太郎を襲う。</p> <p>(A30c) 鴨居より一尺ほど高く、袴を着て帯刀した大男が現れる。</p> <p>(A30d) 平太郎が切りかかると大男は壁中に消え、刀を納めて話を聞くよう言っ。</p> <p>(A30e) 大男は山本五郎左衛門と名乗る。魔王の類で、日本の同類は神野悪五郎。</p> <p>(A30f) 日本には源平合戦の頃に渡った。(=B30b)</p> <p>(A30g) 炬燵の蓋が開き、炭が舞い上がり、茶釜の嫌いなミニズが現れ、這い上がる。平太郎が耐えるうちにミニズは出て来た場所へ戻り、炬燵も元通りになる。</p>

<p>(A30) 悪五郎が来て怪異が起きれば、北を向いて「はや山本五郎左衛門来れり」といえば助けに来ると約束する。</p> <p>(B30) 五郎左衛門が帰るため、平太郎に見送るよう言っ。平太郎はこのまま帰すもの口惜しいと思いつち取るうとするが、身体を押さえつけられ、悪五郎が迎えに来ると約束する。</p> <p>(B30) 悪太郎が襲いに来た際は西南の部屋を縁を棧で叩けば五郎左衛門が参上し、悪五郎を倒すことを約束する。</p> <p>(B30) ただし、棧のことは今後五十年他言してはならないと告げる。</p> <p>(A30) 五郎左衛門が帰る際、見送るよう言っ。平太郎は従うも頭を押さえられ身動きが取れなくなる。</p> <p>(B30) 五郎左衛門が迎えの駕籠に乗る。駕籠から髭足が片方出ている。大勢の妖怪を引き連れ西南の空へと消えていく。</p> <p>(A30) 翌朝、縁に爪で掻いたような跡が残る。</p>	<p>(B30d) 五郎左衛門が平太郎に棧を贈る。</p> <p>(B30e) 悪太郎が襲いに来た際は西南の部屋を縁を棧で叩けば五郎左衛門が参上し、悪五郎を倒すことを約束する。</p> <p>(B30) ただし、棧のことは今後五十年他言してはならないと告げる。</p> <p>(A30) 五郎左衛門が帰る際、見送るよう言っ。平太郎は従うも頭を押さえられ身動きが取れなくなる。</p> <p>(B30) 五郎左衛門が迎えの駕籠に乗る。駕籠から髭足が片方出ている。大勢の妖怪を引き連れ西南の空へと消えていく。</p> <p>(A30) 翌朝、縁に爪で掻いたような跡が残る。</p>	<p>(B30d) 五郎左衛門が平太郎に手棧を贈る。</p> <p>(A30) 五郎左衛門が帰る際、平太郎に見送るよう言っ。このまま帰すのを口惜しく思った平太郎は討ち取ろうとするが、身体を押さえつけられてしまう。</p> <p>(B30) 五郎左衛門が駕籠に乗る。駕籠から髭足が片方出ている。大勢の袴を着た妖怪を連れ、上空へ消えていく。</p> <p>(A30) 翌朝、庭に縦横隙間なく爪で掻いたような跡が残る。</p>	<p>(C30) 壁に大きな顔が現れ、蜻蛉のよう目玉が飛び出、青く光っている。しばらくすると消える。</p> <p>(A30g) 平太郎の厄年にあたり、比熊山で肝試しを行ったこともあり、五郎左衛門が難を与えた。</p> <p>(A30h) 五郎左衛門は、これから九州へ下るため、今後、怪異は起きないと言っ。</p> <p>(B30) 五郎左衛門が平太郎に手棧を贈る。</p> <p>(A30) 悪五郎が来た際、五郎左衛門を呼びながら手棧で北の柱を強く叩けば助けると約束する。</p> <p>(C30) 氏神が上半身だけ姿を現す。</p> <p>(A30) 五郎左衛門が帰る際、平太郎に見送るよう言っ。このまま帰すのを口惜しく思った平太郎は討ち取ろうとするが、身体を押さえつけられてしまう。</p> <p>(B30) 五郎左衛門が駕籠に乗る。駕籠から髭足が片方出ている。大勢の袴を着た妖怪を連れ、上空へ消えていく。</p> <p>(A30) 翌朝、庭に縦横隙間なく爪で掻いたような跡が残る。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

D 『怪談之由来併圖』	E 『福生武大夫一代記』	F 『福生物怪録繪卷』
<p>(D30a)夜五つ頃品格があり体格の良い、浅黄の袴を身につけ、両刀を差した男が、裏口から入ってくる。</p> <p>(C30a)平太郎が退治しようとする男は消え、化物のような声で刀を納めるように言う。</p> <p>(A30a)囲炉裏の蓋が開き、噴き出た灰が大きくなり煙のように高くなる。と目鼻のある大きな坊主頭に変化する。</p> <p>(A30b)坊主頭にはコブのような角があり、そこから煙が出る。煙の間から大きなミミズが何匹も出現する。平太郎はミミズが嫌いで困った。しばらくくするとミミズ、坊主頭は消えた。</p> <p>(C30b)壁に大きな目と口が出現。目はトンボの目のように飛び出て青く光る。これも次第に消える。</p> <p>(A30c)袴の男が現れ、山本五郎左衛門と名乗る。五郎左衛門は、魔王の頭の座を狙っている。</p>	<p>(E30a)夜、五つ頃品格があり体格の良い、浅黄の袴を身につけ、大小を差した四十代の男が、表から入ってくる。</p> <p>(C30a)平太郎が退治しようとする男は消え、化物のような声で刀を納めるように言う。</p> <p>(A30a)囲炉裏の蓋が開き、噴き出た灰が大きくなり煙のように高くなる。と目鼻のある大きな坊主頭に変化する。</p> <p>(A30b)坊主頭にはコブのような角があり、そこから煙が出る。煙の間から大きなミミズが何匹も出現する。平太郎はミミズが嫌いで困った。しばらくくするとミミズ、坊主頭は消えた。</p> <p>(C30b)壁に大きな目と口が出現。目はトンボの目のように飛び出て青く光る。これも次第に消える。</p> <p>(A30c)袴の男が現れ、山本五郎左衛門と名乗る。五郎左衛門は、天下の魔王で三界の国々の頭の座を狙っている。</p>	<p>(D30a)夜、五つ頃品格があり体格の良い、浅黄の袴を身につけ、大小を差した四十代の男が、表から入ってくる。</p> <p>(C30a)平太郎が退治しようとする男は消え、化物のような声で刀を納めるように言う。</p> <p>(A30a)囲炉裏の蓋が開き、噴き出た灰が大きくなり煙のように高くなる。と目鼻のある大きな坊主頭に変化する。</p> <p>(A30b)坊主頭にはコブのような角があり、そこから煙が出る。煙の間から大きなミミズが何匹も出現する。平太郎はミミズが嫌いで困った。</p> <p>(C30b)壁に大きな目と口が出現。困る平太郎を見て笑う。気づくとミミズが消えている。壁の目はトンボの目のように飛び出て青く光り、平太郎を睨む。これも次第に消える。</p> <p>(A30c)袴の男が現れ、山本五郎左衛門と名乗る。五郎左衛門は魔王、魔国の頭の座を狙っている。</p>

<p>(B30c)五郎左衛門は、勇氣ある平太郎の元に悪五郎も襲いにくると予想する。そのときには力を合わせ、悪五郎を倒すと約束する。約束の印として、香木の槌と扇子を贈る。</p> <p>(C30c)冠装束の貴人の半身が出現。平太郎の氏神であり、平太郎の守護神であるという。</p> <p>(A30c)五郎左衛門が帰るのを見送れと言うので平太郎が縁に出ると、頭を押さえられる。</p> <p>(B30c)五郎左衛門は駕籠に乗り、妖怪の行列を引き連れて上空に帰っていった。駕籠の戸口からは大きな髭足が飛び出ている。</p>	<p>(D30c)世界中の勇氣ある十六歳の者を百人連続で驚かすと魔王の頭に驚かせることができると魔王の平太郎は八十六人目で、連続記録が途切れてしまい、また一人目から始めなければならぬ。</p> <p>(A30c)五郎左衛門のライバルは真野悪五郎。</p> <p>(B30c)五郎左衛門は、勇氣ある平太郎の元に悪五郎も襲いにくると予想する。そのときには力を合わせ、悪五郎を倒すと約束する。</p> <p>(C30c)冠装束の貴人の半身が出現。平太郎の氏神であり、平太郎の守護神であるという。</p> <p>(B30c)五郎左衛門は槌を贈り、平太郎が縁に危険を感じた際、槌で成金の柱を打てば五郎左衛門が現れ、力を貸すと言う。</p> <p>(A30c)五郎左衛門が帰るのを見送れと言うので平太郎が縁に出ると、頭を押さえられる。</p> <p>(B30c)五郎左衛門は駕籠に乗り、妖怪の行列を引き連れて上空に帰っていった。駕籠の戸口からは大きな髭足が飛び出ている。</p>	<p>(D30c)世界中の人々を百人連続で驚かせることと魔王の頭になることができると魔王の平太郎は八十六人目で、連続記録が途切れてしまい、また一人目から始めなければならぬ。</p> <p>(A30c)五郎左衛門のライバルは真野悪五郎。</p> <p>(B30c)五郎左衛門は、勇氣ある平太郎の元に悪五郎も襲いにくると予想する。そのときには力を合わせ、悪五郎を倒すと約束する。槌を贈り、北の柱を打てば助けに来ると言う。</p> <p>(C30c)冠装束の貴人の半身が出現。平太郎の氏神であり、平太郎の守護神であるという。</p> <p>(B30c)五郎左衛門が帰るのを見送れと言うので平太郎が縁に出ると、頭を押さえられる。</p> <p>(A30c)五郎左衛門は駕籠に乗り、妖怪の行列を引き連れて上空に帰っていった。駕籠の戸口からは大きな髭足が飛び出ている。</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

G 『稲亭物怪録』(絵巻)	H 『稲亭物怪録』(絵本)
<p>昼から雨が降り、終日客人は来なかつた。</p> <p>(A30a) 夕方から家鳴りが強くなる。</p> <p>(A30b) 夜四つ頃、大きな手が出現し、平太郎を捕まえようとする。平太郎が刀で切り付けようとする。障子を閉めて逃げる。</p> <p>(A30c) 障子の外から「夫へ参らん。先、待れよ」という声がし、鴨居より一尺ほど高く、品良く袴を着て帯刀した大男が現れる。平太郎が切り付けると大男は壁のなかに消え、刀を納めて話を聞くように言う。</p> <p>(A30d) 再び現れ、日本では山本五郎左衛門という魔王の類であると言う。また、日本の魔王は神野悪五郎という者以外にないと言う。</p> <p>(A30e) 炬燵の蓋がひとりでに開き、炭櫃の灰が巻き上がると唐子髪のように丸くなる。</p> <p>(A30f) 丸い物は二つでき、煮え上がると畳の上にミミズがあふれ出た。ミミズは平太郎に這い上がる。平太郎は道にミミズの死骸があれば通れないほどミミズが嫌いであったが耐えた。一時ほど我慢しているとミミズは炭櫃に帰る、炬燵の蓋が閉まった。</p> <p>(A30g) 十六歳は平太郎の厄年にあたり、比熊山での肝試しを行ったため、五郎左衛門が難を与えた。</p> <p>(A30h) 五郎左衛門はこれから九州の鳥々へ下ると言う。</p>	<p>昼から雨が降り、終日客人は来なかつた。</p> <p>(A30a) 夕方から家鳴りが強くなる。</p> <p>(A30b) 四つ頃、大きな手が出現し、平太郎を捕まえようとする。平太郎が刀で切り付けようとする。障子を閉めて逃げる。</p> <p>(A30c) 障子の外から「夫へ参らん。先、待れよ」という声がし、鴨居より一尺ほど高く、品良く袴を着て帯刀した大男が現れる。平太郎が切り付けると大男は壁のなかに消え、刀を納めて話を聞くように言う。</p> <p>(A30d) 再び現れ、日本では山本五郎左衛門という魔王の類であると言う。また、日本の魔王は神野悪五郎という者以外にないと言う。</p> <p>(A30e) 炬燵の蓋がひとりでに開き、炭櫃の灰が巻き上がると唐子髪のように丸くなる。</p> <p>(A30f) 丸い物は二つでき、煮え上がると畳の上にミミズがあふれ出た。ミミズは平太郎に這い上がる。平太郎は道にミミズの死骸があれば通れないほどミミズが嫌いであったが耐えた。一時ほど我慢しているとミミズは炭櫃に帰る、炬燵の蓋が閉まった。</p> <p>(A30g) 十六歳は平太郎の厄年にあたり、比熊山での肝試しを行ったため、五郎左衛門が難を与えた。</p> <p>(A30h) 五郎左衛門はこれから九州の鳥々へ下ると言う。</p>

(A30i) 五郎左衛門は自身による難が終つたため、悪五郎も来ることはなく、今後怪異は起きないと言うが、怪事が続くならば北を向いて「山本五郎左衛門、来れり」と言うよう告げた。

(A30j) 五郎左衛門が帰るため見送れたい、平太郎は縁に出る。討ち取らず帰すのも悔しいと思つたが、五郎左衛門に体を押さえつけられ、身動きが取れなくなる。

(A30k) 庭には大名行列のような迎えが来ており、五郎左衛門は駕籠に乗る。五郎左衛門たちは空へ昇り消えた。

(A30l) 翌朝起きると、床の溝に刺しておいた扇子はそのままあり、庭に縦横隙間なく爪で掻いたような跡が残っていた。

(A30m) 五郎左衛門は自身による難が終つたため、悪五郎も来ることはなく、今後怪異は起きないと言うが、怪事が続くならば北を向いて「山本五郎左衛門、来れり」と言えば怪異は収まると告げた。

(A30n) 五郎左衛門が帰るため見送れたい、平太郎は縁に出る。討ち取らず帰すのも悔しいと思つたが、五郎左衛門に体を押さえつけられ、身動きが取れなくなる。

(A30o) 庭には大名行列のような迎えが来ており、五郎左衛門は駕籠に乗る。五郎左衛門たちは空へ昇り消えた。

(A30p) 翌朝起きると、床の溝に刺しておいた扇子はそのままあり、庭に縦横隙間なく爪で掻いたような跡が残っていた。

<p>I 『稲生平太郎物語』</p> <p>(D30a)夜五つ時頃、浅黄色の袴を着た四十代の男が現れる。平太郎が退治しようとするも、消える。</p> <p>(A30a)開炉裏の蓋が開き、風で灰が吹き上げられ、次第に丸く大きな頭のようなものができる。頭には二つのこぶがでる。そこから煙が噴き出る。</p> <p>(A30b)煙の間からミミズが這い出る。平太郎はミミズが嫌いだが、耐えていると消えた。煙や頭も消える。</p> <p>(C30a)壁に大きな目と口が出現する。目は蜻蛉の目のように突き出、青く光る。</p> <p>(A30c)袴の男が再び現れ、山本五郎左衛門と名乗り、天下の魔王であると言う。魔王の頭の座を狙っている。</p> <p>(D30c)三界の国々を回り、勇氣ある十六歳の者を百人連続で驚かすことで魔王の頭になることができる。</p> <p>(A30d)悪五郎が平太郎を驚かしに来た際は、五郎左衛門が応戦し悪五郎を退治すると約束される。</p>	<p>J 『稲生逢妖談』</p> <p>(D30a)夜五つ時頃、浅黄色の袴を着た四十代の男が現れる。平太郎が退治しようとするも、消える。</p> <p>(A30a)開炉裏の蓋が開き、風で灰が吹き上げられ、次第に丸く大きな頭のようなものができる。頭には二つのこぶがでる。そこから煙が噴き出る。</p> <p>(A30b)煙の間からミミズが這い出る。平太郎はミミズが嫌いだが、耐えていると消えた。煙や頭も消える。</p> <p>(C30a)壁に大きな目と口が出現する。目は蜻蛉の目のように突き出、青く光る。</p> <p>(A30c)袴の男が再び現れ、山本五郎左衛門と名乗り、天下の魔王であると言う。魔王の頭の座を狙っている。</p> <p>(D30c)三界の国々を回り、勇氣ある十六歳の者を百人連続で驚かすことで魔王の頭になることができる。</p> <p>(A30d)しんの悪五郎と魔王の頭の座をめぐり競っている。</p>	<p>K 『稲亭物怪図記』</p> <p>(D30a)夜五つ時頃、浅黄色の袴を着た四十代の男が現れる。平太郎が退治しようとするも、消える。</p> <p>(A30a)開炉裏の蓋が開き、風で灰が吹き上げられ、次第に丸く大きな頭のようなものができる。頭には二つのこぶがでる。そこから煙が噴き出る。</p> <p>(A30b)煙の間からミミズが這い出る。平太郎はミミズが嫌いだが、耐えていると消えた。煙や頭も消える。</p> <p>(C30a)壁に大きな目と口が出現する。目は蜻蛉の目のように突き出、青く光る。</p> <p>(A30c)袴の男が再び現れ、山本五郎左衛門と名乗り、天下の魔王であると言う。魔王の頭の座を狙っている。</p> <p>(D30c)三界の国々を回り、勇氣ある十六歳の者を百人連続で驚かすことで魔王の頭になることができる。</p> <p>(A30d)しんの悪五郎と魔王の頭の座をめぐり競っている。</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>(C30d)冠装束の氏神の上半身が現れる。</p> <p>(A30e)五郎左衛門が帰るので見送るよう言う。平太郎が会釈していると五郎左衛門に頭を押さえつけられる。</p> <p>(B30e)五郎左衛門は庭に下り、駕籠に飛び乗る。大きな髭足が片方駕籠から出ている。五郎左衛門の乗った駕籠を妖怪たちが引いて雲へ向かって帰っていった。</p>	<p>(D30c)五郎左衛門は八十五人連続で成功中だったが、八十六人目の平太郎で失敗し、一人目からやり直したとなる。</p> <p>(A30d)しんの悪五郎と魔王の頭の座をめぐり競っている。</p> <p>(B30c)五郎左衛門は庭に下り、駕籠に飛び乗る。大きな髭足が片方駕籠から出ている。五郎左衛門の乗った駕籠を妖怪たちが引いて雲へ向かって帰っていった。</p>	<p>(D30c)五郎左衛門は八十五人連続で成功中だったが、八十六人目の平太郎で失敗し、一人目からやり直したとなる。</p> <p>(A30d)悪五郎が平太郎を驚かしに来た際は、五郎左衛門が応戦し悪五郎を退治すると約束される。</p> <p>(B30d)冠装束の氏神の上半身が現れる。</p> <p>(A30e)五郎左衛門が帰るので見送るよう言う。平太郎が会釈していると五郎左衛門に頭を押さえつけられる。</p> <p>(B30e)五郎左衛門は庭に下り、駕籠に飛び乗る。大きな髭足が片方駕籠から出ている。五郎左衛門の乗った駕籠を妖怪たちが引いて雲へ向かって帰っていった。</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

注

- 1 複数の諸本があり、題名が統一していないため、本稿では総称として「稲生物怪録」と記した。
- 2 折口信夫全集刊行会編「平田篤胤の伝統」『折口信夫全集20』中央公論社、一九九六年。
- 3 杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。
- 4 アダム・カバット『えふおの化物研究―草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』岩波書店、二〇一七年。
- 5 3に同じ。
- 6 2に同じ。

付記

本文の引用は『平田篤胤全集』巻八「稲生物怪録」による。ただし、旧字体はすべて常用漢字に書き直した。

諸本参照一覧

- 柏成甫『稲生物怪録』：谷川健一編『稲生物怪録絵巻』小学館、一九九四年。
- 稻生武太夫『三次実録物語』：谷川健一編『稲生物怪録絵巻』小学館、一九九四年。
- 平田篤胤『稲生物怪録』：上田萬年、山本信哉、平田篤胤共編『平田篤胤全集第八巻』内外書籍、一九三三年。
- 井丸家所蔵絵巻『妖怪之由来併画』：杉本好伸編『稲生物怪

録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。

吉田家所蔵絵巻『稻生武太夫一代記』：杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。

堀田家所蔵絵巻『稲生物怪録絵巻』：杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。

広島県歴史民俗資料館所蔵絵巻『稻亭物怪録』：杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。

慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵絵本『稻亭物怪録』：杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。

『稻生武太夫一代記』：杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。

『稻生逢妖談』：杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。

西尾市岩瀬文庫所蔵絵本『稻亭物怪図記』：杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』国書刊行会、二〇〇四年。